

江吏部集試注 (十二)

木戸 裕子

(承前)、(十二)は『文献探究』第四十一号に掲載している。

凡例

- 一、底本は板本群書類従を用い、後述の諸本により適宜異同を挙げた。
- 一、校異では、逐一の異同を挙げるのではなく、本文解釈に関わるものだけを記した。したがって、異体字については挙げていない。
- 一、校異に用いた諸本と略号は次の通りである。

- 内閣文庫(旧浅草文庫)本(内) 山口県立図書館本(山)
- 陽明文庫本(陽) 祐徳稲荷本(祐)
- 静嘉堂文庫本(静) 神宮文庫本(神)
- 国会図書館本(国) 無窮会図書館本(無)
- 東大図書館(E45 656)本(東A)
- 東大図書館(旧南葵文庫)本(東B) 岡山大図書館本(岡)
- 島原松平文庫本(島) 東北大図書館本(東北)
- 京大図書館本(京) 多和文庫本(多)
- 賀茂別雷文庫本(賀) 名古屋市立鶴舞中央図書館本(鶴)
- 本朝文粹(新日本古典文学大系)一(粹)
- 本朝麗藻(校本本朝麗藻)一(麗)

一、本文の漢字はできるだけ現行の字体に統一した。ただし、次の漢字は底本の字体を尊重した。

煙・烟 花・華 叢・藜 窓・牕など。

江吏部集試注(十二)(木戸)

- 一、割注など小書の部分は「」に入れて示した。
- 一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではないが、古辞書類を参考にした。

付記 本稿を作成するにあたっては、東京大学史料編纂所データベース、北京大学の全唐詩電子検索システムを利用させていただいた。学恩に感謝いたします。

※本稿では巻上三十四番から三十六番までの詩及び詩序を取り扱う。

三十四 過海浦(同作中其六)

- | | |
|---------|------------------|
| 經過海浦水漫漫 | 海浦を經過すれば水々々 |
| 幽趣風烟極目看 | 幽趣 風烟 目を極めて看る |
| 聘使家留臨古岸 | 聘使 家に留まりて古岸に臨み |
| 漁夫舟泛任輕瀾 | 漁夫 船を泛かべて輕瀾に任す |
| 郷心遠樹孤雲隔 | 郷心 遠樹 孤雲隔たり |
| 客路辺山落日残 | 客路 辺山 落日残る |
| 自感去来潮有信 | 自づから感ず 去来 潮に信有りと |
| 不知早晚歇帰鞍 | 知らず 早晚 帰鞍を歇めんことを |

- 【校異】極一授(陽) 聘一躬(島)一躬(ミセケチシテ聘乎ト傍書)
 一(ミセケチシテ聘ト傍書)(東A) 古一右(島) 舟泛一泛(泛ノ上ニ舟ト補入)(内) 瀾一潤(島) 樹一村(ミセケチシテ樹ト傍書)(内) 辺一島(京) 歇一影(京・山・祐・神・鶴)

【押韻】

〇〇××××× 〇×〇〇××× 上平声寒韻
 ××〇〇〇×× 〇〇〇×〇〇〇 上平声寒韻
 〇〇××〇〇× ××〇〇××× 上平声寒韻
 ×××〇〇×× 〇×〇×××〇 上平声寒韻

初句は二六対の原則を破っている。二字目の「過」を去声に読めば二六対は守られるが、意味が変わってくるうえ、今度は二四不
 同の原則を破り、孤平を犯すことにもなる。

【語釈】

◎海浦 海辺の浜。湾。「金陵控海浦水带具京」〔全唐詩〕「入朝曲」李白 本詩の「海浦」はこの「名ある所所」なのか記述しないが、熊本守雄氏によれば『惠慶集』一九〇「すまのうらにたび人ゆくまちどをに宮このひとは思ふらむすまのはまべはすぎうかりけり」、一三四「障子のゑにすまのうらのかたかき、神の社にふねよりゆく人の浪のか、りければたよせにふしをがみてみてぐらたてまつるをたよせとおもはざらなんわだつみのなみのこゝろをかみもしらん」、一三五「又 しらなみにいろひてまがふみてぐらもたかせにうけよしまぬしの神」の三首が粟田障子和歌として本詩に対応する歌であるという。それによれば、本詩は須磨の海辺を詠んだものである。ただし、『惠慶集』一三四、一三五番歌は本詩の内容とはかなり違っている。

◎漫漫 広々として果てしないさま。「海漫漫 直下無底旁無辺」〔白氏文集〕一二八「海漫漫」
 ◎幽趣 奥深い趣のある景色「広庭備幽趣 復対商山岑」〔全唐詩〕「春晚寄楊十二兼呈趙八」元稹「常云遇清景 必約同幽趣」〔白氏文集〕三三〇「秋日懷杓直」

◎風烟 風もや。かすみ。「管領好風烟 輕欺凡草木」〔白氏文集〕三六五「題小橋前新竹招客」あるいは、この「風烟」には須磨の景物である藻塩を焼く煙の意味をふくませているか。「須磨の海人の塩焼くけぶり風をいたみ思はぬかたにたなびきにけり」〔古今集〕七〇八題しらず 読人しらず ただし、平安漢詩においても「風烟」を「けむり」の意で用いた例は未見。

◎極目 視力の及ぶかぎり。見渡すかぎり。「極目煙霞外 孤舟一使星」〔全唐詩〕卷三三七「賦得綿綿思遠道送岑判官入嶺」錢起

◎聘使 禮物を持って外国を訪れる使。「故今因聘使、便令迎之」〔続日本紀〕宝龜七年四月壬申(十五日)条 続日本紀の例は遣唐使を指しているが、本詩においては、惠慶集一九〇の詞書にあるごとく、国内の旅人を指すものと思われる。

◎古岸 古くからの岸べ。須磨をさす。
 ◎輕瀾 瀾は波、さざ波。細かいさざ波。「悠想盼長川 輕瀾渺如帶」〔先秦漢魏晉南北朝詩〕「晋詩」卷一二「三月三日詩」庾闡

◎郷心 故郷を思う心。「貧泥客路粘難出 愁鎖郷心掣不開」〔白氏文集〕三〇八八「醉別程秀才」郷心遠樹孤雲跡 客路辺山片月寒」〔文華秀麗集〕「敬和左神策大將軍春日閑院餞美州藤太守甲州藤判官之作」巨勢識人 以下の五、六句は巨勢識人の作による。

◎遠樹 遠くに見える樹「遠樹入煙尽 客恨狀山重」〔全唐詩補逸〕卷之十一「登香爐峯寄遠人」張祜「遠樹帶行客 孤村当落暉」〔全唐詩〕卷一百二十五「送基母潛落第還郷」王維

◎客路 旅路。用例は「郷心」の項参照。
 ◎辺山 辺地の山。用例は「郷心」の項参照。

◎去来 行くことと来ること。「去来江口守空船 繞船月明江水寒」〔白氏文集〕六〇三「琵琶引」「去来 ユキ、タル」〔観智院本類聚名義抄〕

◎去来 行くことと来ること。「去来江口守空船 繞船月明江水寒」〔白氏文集〕六〇三「琵琶引」「去来 ユキ、タル」〔観智院本類聚名義抄〕

◎潮有信潮が引いては必ず満ちることから、必ず帰ってくること。

「相恨不如潮有信 相思始覺海非深」〔白氏文集〕三一四九「浪淘沙」

「往來潮有信 朝暮事成非」〔全唐詩〕卷二九四「登潤州芙蓉樓」崔峒

◎早晚いつしか。「春來消息斷 早晚是歸時」〔全唐詩〕卷二六

「遠別離」令狐楚

◎歇休。歸鞍は家に帰る馬。馬をとどめて歸路に就く。「御溝新柳色 处处處處處處歸鞍」〔全唐詩〕卷三五七「春日退朝」劉禹錫

【通釈】

海辺を過ぎる「粟田障子の作 その六」

海辺を行けば広大な水は果てしなく続き

もやにかすんだ景色を遙かに見渡される

都からの使いは家の中から須磨の岸辺を臨み

漁夫は沖に出て舟をさざ波に浮かべている

遠くの樹を見れば故郷を思う心がわき起こるが、ひとひらの雲が視界を遮り

旅路の行く手に見える山には今しも日が沈もうとしている

潮が満ち干を繰り返すように、行けば必ず帰ってこられると信じて

はいるが

今はわからない、何時になれば馬をとどめて帰宅の途につけるのか

三十五 長江瞻望多〔以賒為韻〕

日暮登高瞻望多

日暮れて登高すれば瞻望多し

江吏部集試注(十二)(木戸)

長江渺々往來賒

尋陽九道唯沙月

楚水千程幾浪花

心与過流歸鳥去

眼隨遠岸遠帆遮

忽拋東海浴恩沢

文士輝榮在我家

長江渺々として往來賒かなり

尋陽 九道 唯だ沙月のみ

楚水 千程 幾ばくの浪花

心は過流 歸鳥とともに帰り

眼は遠岸 遠帆に随ひて遮らる

長江渺々として往來賒かなり

尋陽 九道 唯だ沙月のみ

【校異】

渺一渺(内、陽、靜、東A、東B、山、祐、神、島、京、鶴、多)

尋一潯(山) 東海一東方海(陽、山、祐、神、京、鶴) 文一恩

【ミセケチシテ文ト傍書】(陽) 輝一耀(陽、山、祐、京、鶴)

家一客【ミセケチシテ家ト傍書】(靜)

【押韻】

××○○○○×○ ○○○×××○○○ 下平声麻韻

×○○×○○○× ×○○○○○○○ 下平声麻韻

○○○○○○○○× ×○○×××○○○ 下平声麻韻

×○○××××× ○○○○○××○ 下平声麻韻

×○○××××× ○○○○○××○ 下平声麻韻

【語釈】

◎長江大きな川。ここでは詩の尾聯にある「東海」の語から、匡衡

が国司となつた尾張国と隣国美濃国の国境を流れる木曾川を指すか。

ただし、平安時代にはこの川はまだ木曾川とは呼ばれていなかった

らしい。平安漢詩文では藤原忠通の「法性寺関白御集」に「長江」

の語があるが、どこの川を指しているか不明。「暮指長江帆影去夜

懸断峡月眉疎」〔法性寺関白御集〕「雲水望中遠」

◎登高高いところに登りあたりをながめること。うれいをはらす為

江吏部集試注(十二)(木戸)

一七

- に行うことが多い。「登茲楼以四望兮 聊以銷憂」〔文選〕卷十一「登樓賦」王粲〕「登高臨四野 北望青山阿」〔文選〕卷二三「詠懷」第六 阮籍〕「下邳田地平如掌 何處登高望梓州」〔白氏文集〕七九九「九日寄行簡」〕「登高望処九陽重 天道人心髮不容」〔菅家文章〕卷五「九日侍宴群臣獻壽 心製」〕
- ◎瞻望はるかに仰ぎ見る。「郷遠去不得 無日不瞻望」〔白氏文集〕四五二「夜雨」〕「東出西流只寄瞻望於暁月」〔本朝文粹〕卷七「為清慎公報吳越王書」大江朝綱〕
- ◎渺々かすかなさま。水などのはてしないさま。「平江渺渺來人遠 落日亭亭向客低 沙鳥不知陵谷變 朝飛暮去弋陽溪」〔全唐詩〕卷一五一「登余千古鼎城」劉長卿〕「王右軍之遊四郡 鼇海之浪渺々」〔本朝文粹〕卷三「松竹對策」藤原広業〕
- ◎賒はるか「壽宮星月異 仙路往來賒」〔全唐詩〕卷二七一「貞懿皇后挽歌三首」二 竇叔向〕「秋風海上宿蘆花 況復蕭蕭客望賒」〔菅家文章〕卷一「海上月夜」〕
- ◎尋陽いまの江西省九江県。白居易が元和十年に左遷された地でもある。この地に流れる大河が潯陽で、この河の辺で白居易は「琵琶引」を作った。「元和十年、予左遷九江郡司馬」〔白氏文集〕六〇二「琵琶引序」〕「潯陽江頭夜送客 楓葉荻花秋索索」〔白氏文集〕六〇三「琵琶引」〕
- ◎九道は九つの流れ。「西江流水到江州 聞道分成九道流」〔全唐詩〕卷四一五「相憶淚」元稹〕
- ◎楚水は「巴山楚水淒涼地 二十三年棄置身」〔全唐詩〕卷三六〇「酬樂天揚州初逢席上見贈」劉禹錫〕「故園望斷欲何如 楚水吳山萬里余」〔白氏文集〕六七〇「江南送北客因憑寄徐州兄弟書」〕
- ◎過流は過ぎていく流れ。「いとどしく過ぎゆく方の恋しきにうらやましくもかへる浪かな」〔伊勢物語〕第七段〕に通じる表現。
- ◎帰鳥はねぐらに帰る鳥。「窺潜魚以漁火暈 逐帰鳥釣帆孤」〔菅家文章〕卷七「秋湖賦」〔本朝文粹〕卷一にも所収〕
- ◎東海は東方の海。平安漢詩文では、多く「北山」と対で用いられ、蓬萊山が浮かぶ仙境を表わすが、匡衡は国司となつた東海道の国、尾張国を指して使っている。「某、式部権大輔・昇殿侍読・東宮学士・尾張守、是殿下吹竽之力也。……匡衡、為東海之遠吏、不知北闕之妙簡」〔本朝文粹〕卷七「可被上啓拳周明春所望事」大江匡衡〕
- ◎恩沢は天子のめぐみ。「待兒扶起嬌無力 始是新承恩沢時」〔白氏文集〕五九六「長恨歌」〕「較量皇恩沢 翻來四海波」〔菅家文章〕卷二「九月九日侍宴 心製」〕
- ◎文士は詩文をつくる人。文人に同じ。「世之惑者 多嘲文士 彼我殊觀 誰敢改業」〔本朝文粹〕卷十一「対殘菊待寒月」紀長谷雄〕
- ◎輝栄は輝かしく栄える。栄暉も同じ。「棠棣輝栄并桂枝 芝蘭芳馥和荆葉」〔白氏文集〕五八四「醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十四先輩昆季」〕「原憲藜戸 猶蔑駟蓋之榮暉」〔本朝文粹〕卷二「意見十二箇条」三善清行〕

【通釈】

長江のはるかな眺め「賒字をもって韻字とする」

日の暮れ方に高台に登ればどこまでも眺めは続く

長江は上流も下流もはるか彼方までかすんでいる

あの白樂天が左遷された尋陽の九つの流れにも似たこの川を、ただ月だけが照らし

白樂天と劉禹錫が詩を贈りあつた楚水にも似たこの川に、どこまでも波が続く

私の心は行く川の流れやねぐらに帰る鳥と共にこの地を去ろうとし

ているのに

眼は遠くの岸や遠ざかる船の帆がかすんで見えなくなるにしたがつて行く手を遮られる（この身はこの地にとどめられている）
今すぐにでもこの地を抛つて、帝のおそばで御めぐみに浴したい
文人の栄えは他でもない我が大江家にこそあるのだから（このよう
な田舎ではなく都にあつて帝に仕えるのが当然の我が身なのだ）

三十六 七言夏夜陪左相府池亭守庚申同賦池清知雨晴応教一首（并序

以深為韻）

左相府尊閣（イ閣）者

希代栄貴之器也

居戚里為王者之親舅

入法門為如来之弟子

遊文場為花月之主

在朝廷為社稷之臣

外孫則鳳

作皇子聖日照帝梧之枝

長男則龍

作納言家風期台槐之葉

以薦賢為己任

以弘経為身謀

夫釈尊之出世焉為一仏乗也

相府之仕朝焉亦為一仏乗也

左相府尊閣は

希代の栄貴の器なり

戚里に居りては王者の親舅たり

訪問に入りては如来の弟子たり

文場に遊びては花月の主たり

朝廷に在りては社稷の臣たり

外孫は則ち鳳

皇子と作りて聖日 帝梧の枝を

照らし

長男は則ち龍

納言と作りて家風 台槐の葉に

期す

賢を薦むるを以て己が任と為し

経を弘むるを以て身の謀と為す

夫れ釈尊の世に出づるや一仏乗
の為なり

江吏部集試注（十二）（木戸）

是以

毎年展三十講之梵席
歷日叩八万歳之疑闕
以珍貨供養以詩篇讚揚

今夜之庚申蓋在斯而已
觀夫

見池水之一清

知天雨之已霽

对昆明而張帷幕

不論離畢之月

鑿積翠而促軒車

誰問連漢之星

至彼

攬之不竭挹而難測

魏徵之鏡懸台

尽披天下之雲霧

傳説之舟鼓棹

自安海内之波瀾者歟

于時

龍象談論鸕鷀遊樂

昔大唐左僕射迎経像

於長安万年之地

今本朝左相府弘仏法

の為なり

是を以て

毎年 三十講の梵席を展べ
曆日 八万歳の疑闕を叩く
珍貨を以て供養し 詩篇を以て
讚揚す

今夜の庚申蓋し斯く在るのみ
觀れば夫れ

池水の一清を見て

天雨の已に霽れたるを知る

昆明に對ひて帷幕を張れば

離畢の月を論ぜず

積翠を鑿みて軒車を促せば

誰か連漢の星を問はん

彼の

之を攬るも竭まず、挹めども測

り難きに至りては

魏徵の鏡台に懸け

尽く天下の雲霧を披き

傳説の舟 棹を鼓し

自から海内の波瀾を安んずる者

か

時に

龍象談論し 鸕鷀遊樂す

昔 大唐の左僕射 経像を長安
万年の地に迎へ
今 本朝の左相府 仏法を洛陽

於洛陽五月之天
慙染秃毫猥記感事云爾

五月の天に弘む
慙づらくは秃毫を染め 猥りに
感事を記することをと云ふこと
爾しかり

前池清冷動風吟

前池 清冷にして風吟に動く

知是雨晴水正深

知る 是れ雨晴れて水正に深きことを

底徹先諳山月色

底徹とりて先づ諳そらんず 山月の色

雲収誰聽浪花音

雲収まりて誰か聽かん 浪花の音

鑿流雖慕隨車跡

流れを鑿みて隨車の跡を慕ふと雖も

臨岸猶忘仮蓋心

岸に臨みて猶し忘る仮蓋かがいの心

多歲幸陪池上飲

多歲幸ひに池上の飲に陪し

浮沈恩沢送光陰

恩沢に浮沈し光陰を送らん

【校異】

閣一閣 (神、京) 一閣 (ミセケチシテ閣ト傍書) (内) 王一ナシ

〔ミセケチシテ王ト傍書〕 (内) 夫一失〔ミセケチシテ夫ト傍書〕

(東A) 蔵一歳 (底本、山、祐、神、無、京 内閣文庫本、静嘉

堂文庫本他ニ依ッテ改ム) 一ナシ (山) 之已一而巳一 (祐、京)

一而〔ミセケチ〕巳 (山) 一之〔ナシ〕 (鶴) 帷一惟〔朱筆デ

帷ト傍書〕 (東A) 積一ナシ (京) 星一ナシ (陽、祐、京、鶴)

一ナシ〔ミセケチシテ星ト傍書〕 (山) 竭一渴 (内、島) 披一

被 (山) 天下之一ナシ〔天下之ト傍書〕 (祐) 説一〔以下龍象

マデ脱文、傍書ニテ補入〕 (陽) 瀾一潤 (島、多) 於一遊 (山)

感一盛 (山、多) 先一光 (山、祐、神、京、鶴) 諳一暗 (底

本、他本ニヨリ改ム)

【押韻】

○○○××○	○××○××○	下平声侵韻
××○○○××	○○○××○○	下平声侵韻
×○○×○○×	○×○○××○	下平声侵韻
○××○○××	○○○××○○	下平声侵韻

【制作年代】寛弘六年五月六日

詩序中の左相府は藤原道長、道長が皇子である外孫を持ったのは
彰子が後一条天皇を産んだ寛弘五年(一〇〇八)九月以降だが、こ
れ以後、匡衡が亡くなる長和元年(一〇一二)までの間に、詩序に
あるように五月に庚申の日があつたのは、寛弘六年五月六日のみで
ある。

【語釈】

◎池清知雨晴 句題の典拠は不明。なお、本詩の頷聯・頸聯、及び本
詩と同題、同韻の作品(おそらくすべて頷聯・頸聯のみ)が『類題
古詩』二四六番〜二五三番に収められている。

◎榮貴 榮えて尊いこと。

◎戚里 天子の外戚。「萬石君、名奮。……家貧。有姊能鼓琴。高祖

曰、若能從我乎。曰、願尽力。於是高祖召其姊為美人、以奮為中涓。

受書謁、徙其家長安中戚里。〔索隱曰、小顏云、於上、有姻戚者皆

居之。故名其里戚里、長安記、戚里在城内。〕〔史記〕「萬石張叔

列伝」〔戚里誇為賢駙馬 儒家認作好詩人〕〔白氏文集〕三一七

二「送荅州崔大夫駙馬赴鎮」〔且將戚里枝親 雖老雖少 亦可登

清階歟〕〔本朝文粹〕卷四「為忠義公辭職第一表」菅原文時

◎親舅 叔父。道長は一条天皇の母后、藤原詮子の弟。「忠仁公德崇

功大、仁義兼資。況先帝之親舅、陛下之外祖」〔本朝文粹〕卷四

「為昭宣公辭撰政上太上皇第一表」菅原道真

◎文場 詩作の場。詩場に同じ。一「月下即事」の「詩場」の語釈參

照。

◎花月二花と月。詩境をもたらず自然美。「其主為誰、左武衛藤相公。善彈箏能翫筆、誠花月之主」〔本朝文粹〕卷十「後二月遊白河院同賦花影泛春池 応教」源順〕「春宵花月宴 吟詠対綺牋」〔江吏部集〕卷中「述懷古調詩」

◎社稷之臣二社は土地の神、稷は五穀の神。社稷で国家をいう。社稷之臣は国家の重臣。「有臣柳莊也者、非寡人之臣、社稷之臣也」

〔礼記〕檀弓下〕

◎鳳二聖人が世に出るときに現れるという瑞鳥。竹の実を食べ、梧桐に栖むといわれる。天子のしるしとしても用いられる。しかしながら、皇太子を指す例は匡衡以外には未見。「向蘋藻以觀魚、猶垂渭陽之釣。栽梧桐以待鳳、載轄博陸之車者也」〔江吏部集〕卷上「夏日陪左相府書閣同賦水樹多佳趣 応教」〔本朝文粹〕卷八にも所収〕

◎聖日二聖なる太陽。天子のこと。「皇風吹欲斷 聖日映逾明」〔全唐詩〕卷二八八「小 苑春望宮池柳色」楊系〕

◎帝梧二梧はあおぎり。鳳凰は帝梧に栖むという。「韓詩外伝曰、黃帝時、鳳凰栖梧桐、食帝竹実」〔芸文類聚〕卷八十九「木部下」竹〕

◎龍二立派な人物。「岌歎曰、名可聞而身不可見。德可仰而形不可觀。吾而今而後、知先生人中之龍」〔晋書〕「隱逸伝」〕「復雖有良宴嘉会、而座無其人、詩境寂寞。大王以与翰林兩菅學士通家、人中得龍、席上多珍」〔本朝文粹〕卷十「暮春陪上州大王池亭、同賦渡水落花来」源順〕

◎納言二道長の長男頼通はこの年三月権中納言となった。〔公卿補任〕
◎家風二家の伝統。家の風が台槐の葉を期すとは菅原道真母の「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」〔拾遺和歌集〕

卷八雜上「菅原の大臣かうぶりし侍りける夜、母の詠み侍りける」四七三〕に通じる表現。

◎台槐二三台と三槐。三公の位。周の時代に槐の木を三台の前に植えたことから槐は三公の象徴となった。三公は大臣(太政大臣、左大臣、右大臣)の唐名。

◎薦賢二賢者を推挙する。「裴遵慶、字少良、絳州聞喜人。……以尚書右僕射復知選事、朝廷優其老、聽就第注官。時以為榮。……性淳正、老而彌謹。每薦賢、有來謝者、以為恥。諫而見從、即内益畏。雖親近、但記其削稟疏數、而莫知所言。大曆十年薨、年九十餘」〔新唐書〕列伝第六十五〕

◎弘經二仏教の經典をひろめる。仏法をひろめる。

◎一仏乘二如来の教えを車乘にたとえた語。一切衆生が尽く成仏するための道。一乘に同じ。「十方仏土中、唯一仏乘」〔法華經〕「方便品」〕

◎三十講之梵席二法華三十講。道長は毎年五月に自邸で法華三十講を催していた。十二「今年四月一日陰雨……」の「法華三十講」の語釈参照。寛弘六年の法華三十講は四月二十六日に始まり、五月二十三日に終了した。〔御堂関白記〕寛弘六年四月二十六日条〕本詩会は五月六日の講の終了後に行われたらしい。

◎歴日二日を経る。日を過す。

◎八万藏之疑闕二八万藏は八万四千藏に同じ。仏教の教えのこと「若持八万四千法藏、十二部經、為人演說、令諸聽者得六神通」〔法華經〕「見宝塔品」〕「一音能說、仏語雖無二三、諸機所詮、法藏既有八万」〔本朝文粹〕卷三「鳥獸言語對策」菅原淳茂〕

◎珍貨二珍しい宝物。「抑人臣之道、交不出境。錦綺珍貨、奈国憲何」〔本朝文粹〕卷七「為右丞相送大唐吳公書狀」菅原文時〕

◎昆明二昆明池。長安の西南にあった池。漢の武帝が昆明国の滇池を

模して作り、水戦の訓練を行った。「詔以昆明近帝城 官家不得收其征」《白氏文集》一三七「昆明春」ここは、道長邸の池をいう。

◎帷幕二とばりとまく。「池邊雨過飄帷幕 海上風來動綺羅」《全唐詩》卷五三五「聞州中有讒寄崔大夫兼簡邢羣評事」許渾

◎離畢之月二畢は雨降り星。月が畢星にかかると雨が降ると考えられた。「月離于畢 俾滂沱矣」毛伝、月離陰星則雨」《詩經》小雅

「漸漸之石」尚書洪範曰、庶民為星、星有好風、星有好雨。月之從星、則以風雨「月經于箕則多風、離于畢則多雨也」《芸文類聚》

卷一「天部上 雨」月行離畢急 龍走召雲忙」《白氏文集》二六五二「酬鄭侍御多雨春空過詩三十韻」

◎積翠二洛陽にあつた池の名。唐の太宗がこの池に行幸し、群臣と詩を賦した。「太宗在洛陽宮、幸積翠池、宴群臣、酒酣各賦一事。太宗賦尚書曰、日昃玩百篇、臨燈披五典。夏康既逸豫、商辛亦流瀕。恣情昏主多、克己明君鮮。滅身資累患、成名由積善。微賦西漢曰、

受降臨軹道、爭長趣鴻門。驅伝渭橋上、觀兵細柳屯。夜宴經柏谷、朝遊出杜原。終藉叔孫禮、方知皇帝尊。太宗曰、魏徵每言、必約我以札也。尋以修定五札、当封一子為県男、請讓孤兄子叔慈。太宗愴然曰、卿之此心、可以励俗。遂許之」《旧唐書》列伝第二十一

「魏徵」

◎軒車二立派な車。身分ある人が乗る車。「軒車擁路光照地 糸管入門声沸天」《白氏文集》七四一「宴周皓大夫光福宅」

◎連漢之星二漢は天の川。天の川に連なる星と降雨の關係は不明。

◎魏徵之鏡二魏徵は唐の太宗に仕えた文人。諫議大夫として太宗を輔佐した。彼が亡くなった時、太宗は自分の行いを正す鏡を失つたと嘆いた。「嘗臨朝謂侍臣曰、夫以銅為鏡、可以正衣冠。以古為鏡、可以知興替。以人為鏡、可以明得失。朕常保此三鏡、以防己過。今魏徵殂逝、遂亡一鏡矣」《旧唐書》列伝第二十一「魏徵」

◎天下之雲霧二「衛崔見而奇之曰、此人、人之水鏡、見之螢然、若披雲霧觀青天也」《晋書》樂広伝による修辭

◎傳説之舟二殷の高宗が傳説を宰相にしたとき、もし大川を渡るような場合は舟や楫となつて、自分を助けてほしいと命じた故事。天子を補佐する名宰相のこと。「朝夕納誨、以輔台徳。若金、用汝作礪。若濟巨川、用汝作舟楫」《書經》説命上 傳説の故事については十二「今年四月一日陰雨……」の「旱天霖雨」の語釈、三十一「春日野行」の「和羹」の語釈も参照のこと。

◎海内之波瀾二海内は国内、天下。波瀾はなみ。また、さわぎ、不穏な状態をたとえる。

◎龍象二學徳すぐれた僧侶。「龍象投新社 鵝鸞失故行」《白氏文集》一一一「郡齋暇日憶廬山草堂兼寄二林僧社三十韻多敘貶官已來出處之意」左丞相尊閣、七八年来、毎年五月、更就齋房、以講法華。諸宗龍象之弁説、四種尊卑之聽聞、事為恒規、不須復説」《本朝文粹》卷十「夏日侍左相府池亭諸道講論後同賦松声当夏寒応教」大江以言

◎鵝鸞二殿上人の唐名。二十六「初冬与諸君談話」の「鵝鸞」の語釈参照。

◎大唐左僕射二唐代の僕射は宰相。天子の政を輔けた。左右それぞれ一人ずつを置く。仏教をひろめた左僕射については不明。

◎洛陽二唐の都だが、本朝では京都の別名。

◎禿毫二先のすり切れた筆。自分の文章についての謙称。禿筆に同じ。「慙非重席之才、慙染禿筆而記」《本朝文粹》卷十「夏日侍左相府池亭諸道講論後同賦松声当夏寒応教」大江以言

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

◎風吟二風の音。「桂和秋露滴 松帯夜風吟」《全唐詩》卷六九五「劉得仁墓」韋莊「塵事渺茫夢覺曉 風吟蕭灑葉零昏」《本朝無題詩》卷六「秋日林亭即事」藤原忠通「ただし、唐詩の例は、動詞

として用いる例がほとんどである。韋莊の例も「松は夜を帯びて風吟ず」と訓ずるべきであろう。

◎底徹ニ水底まで見通せる。「義淵底徹、終知揭之津」〔本朝文粹〕

卷九「後漢書竟宴各詠史得龐公」紀長谷雄

◎隨車跡ニ「聞説隨車有零雨 此時偏動子荆才」〔全唐詩〕卷三五

九「述旧賀遷寄陝虢孫常侍」劉禹錫

◎仮蓋心ニかさを借りようとする気持。孔子家語の故事による。孔子が外出しようとした時に雨にあつたが、車につける蓋(かさ)が無かつた。門人は子夏から借りるようすすめたが、孔子は子夏の人柄を考へて借りなかつた。「孔子將行、遇雨。不仮蓋於子夏、護其短也」〔太平御覽〕卷十「雨上」所引「孔子家語」。「孔子將行、雨而無蓋。門人曰、商也有之。孔子曰、商之為人也、甚悛財。吾聞、與人交、推其長者、違其短者。故能久也」〔孔子家語〕「觀思」

◎池上飲ニ池のほとりでの宴。「積翠」の語釈参照。

◎恩沢ニ天子、君主の恵み。三十五「長江瞻望多」の「恩沢」の語釈参照。

◎光陰ニ歲月

【通釈】

七言 夏の夜左大臣様の池亭に陪して庚申を守る。

皆で「池が澄んで雨が上がったことを知る」という題で詩を作る。(併せて序文、深字を韻字とした)

左大臣様は世にもまれなる尊く栄えたお方である。

外戚としては帝の叔父上であり、法門においては阿弥陀如来の弟子となられた。

詩会の場では花月の主人となられ、朝廷にあつては国家の重臣でい

らつしやる。

外孫は鳳凰、東宮として帝の恵みを一身に浴びていらつしやる。

ご長男は龍、この春、中納言となり、将来の大臣として一家の期待を集めておいでだ。

まことに、左大臣様は賢人を推挙することを国家のための自らの任務とされ、仏の教えをひろめることでご自身の後生をお助けになつて

いる。そもそも、釈迦如来がこの世にお生まれになつたのが衆生を救うためであるならば、左大臣様が朝廷にお仕えになることもまた、衆生を救う為なのである。

こういう次第で左大臣様は毎年法華三十講をご開催になり

日々、仏の教えに対する疑問を打ち砕いてくださるのだ。

珍しい財宝で仏を供養したあとは、詩によつて仏をほめ称えよう。

今夜の庚申詩会はまこと、仏を供養し称えるためのものである。

池の水が澄みわたつているのを見れば、雨がすでに上がつて空が晴れたことがわかる。

昔、漢の武帝は昆明池のほとりに帷幕を張りめぐらして戦の訓練をしたというが、月が畢(雨降り星)にかかつているかどうかなど関係ない。(雨は降っていないのだから)

また、唐の太宗は積翠池のほとりで立派な車に乗つた高官を集めて詩宴を開いたというが、その時だけが天の川に連なる星を気にしたのだろうか。(雨は上がったのだから誰も気にしはしない)

あの、汲めども尽きず、測りがたいほど澄み切つた池に至つてはそれは唐の太宗が自らを正す鏡だと言つた魏徴のように、何もかも映し出す鏡のよう、天下の霧をすべて払つてしまふのであろうか。(左大臣さまは魏徴のごとく、聡明で清廉な国家の重臣である)

それはまた、傳説が棹さして舟を進めた時のような穏やかな水面、

海内の波が自然に穏やかになっていくのであろう。(傳説のごとき名臣である左大臣様のおかげで国の内外は治まるのである)

今この時、高僧たちは仏典を論じ、殿上人たちは管弦の遊びに興じている。

昔、大唐の左僕射は仏典と仏像を永遠の都長安に迎えたが、

今、我が国の左大臣様は平安の都の五月の空の下、仏法をひろめていらつしやる。

恥ずかしながら、私はつたない筆を染め、今日の盛事を記録いたしましたと申し上げる次第でございます

前庭の池は冷たく澄んで風の音にゆらぐ

そこで気づいた 雨が上がって水が深々とたたえられていることに

池の水は底まで澄みわたり、山や月の色を映し

雲は何処とも無く消え、波の音も聞えなくなった

遣り水の流れを見れば先ほどまでの雨が恋しくも思われるが

晴れ渡った池の岸にいと先ほどまでのかさを借りたいと思う

気持も忘れてしまう

幸いにも私は長年、太宗の積翠池での宴にも比すべき道長様の

池のほとりの宴に陪席してきた

これからも道長様のご恩に身を任せ年月を送りたいものだ

(二〇〇三年十月一日受理)